

高楠順次郎の教育思想： 日華学堂の学生の転地勉学を通じて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 武蔵野大学グローバルスタディーズ研究所 公開日: 2020-06-23 キーワード: 作成者: 欒, 殿武 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1172

高楠順次郎の教育思想

——日華学堂の学生の転地勉学を通じて

A Study of the Educational Thought of Junjiro Takakusu:
Insights from a Field Study by the Students of the Nikka School

樂 殿 武

はじめに

清国人留学生の予備教育と言え、弘文学院がもっとも有名である。一八九六年に一三名の清国人留学生が来日し、嘉納治五郎の監督の下で日本語を勉強し始めた¹。嘉納治五郎はこの嘉納塾の後、一八九九年一〇月、神田区三崎町一丁目二番地に亦楽学院を創設し、三矢重松を主任教授に起用して五人の清国人留学生を教授監督させた²。一九〇二年、亦楽学院は規模を拡大して牛込区西五軒町に移り、弘文学院と改名し、後に宏文学院に名称変更して、清国人留学生の急増で分校五校を増設し、東京に押し寄せた清国人留学生の大部分を収容し、隆盛を極めた³。

しかし、亦楽学院より先に、清国人留学生の予備教育を専門的に行った学校が存在していた。それは高楠順次郎が総監を務めた日華学堂である。日華学堂は一八九八年六月⁴に清国学生の速成教育を目的に、日本語と普通学の習得を中心として、専門教育の予備教育機関として創立され、わずか三年間あまりしか存在しなかったが、中国近代史に名が残る人材を輩出し、特筆に値する教育機関であった。ところが、『史話 高楠順次郎』（前嶋信次、『大法輪』一九五一年七月号～一〇月号）、『高楠順次郎先生伝』（鷹谷俊之、武蔵野女子学院、一九五七）、『雪頂・高楠順次郎の研究 その生涯と事蹟』（武蔵野女子大学仏教文化研究所編、大東出版社、一九七九年）など、高楠順次郎の生涯を語る書物に日華学堂の設立や教育に関する記述はなく、付属年表の明治三十一年（一九九八）の項にわずか「この頃、日華学堂を設立、支那留学生を監督」のみ掲載されている。高楠順次郎が設立した日華学堂の教育及び中国人留学生教育に果たした役割があまり評価されていないのではないかと思われる。

そのため、本稿は、現存の日華学堂の学生の転地勉学に関する往復書簡及びその他の資料を基に、高楠順次郎の教育思想を検討してみたい。

- 1 この一三名の学生は、清国政府の派遣ではなく、日本駐在清国大使館が上海周辺から募集したいわゆる使館留学生である。来日後間もなく四名が帰国し、さらに二名が中途退学して、卒業したのは七名であった。『在本邦清国留学生関係雑纂 陸軍海軍学生外之部』（3-2530-0011～0034）を参照。
- 2 その五人は戩翼鞏（湖北）、鄒瑞昌（安徽、二五歳）、熊垓（江西、一七歳）、黄大暹（四川、一七歳）、李盛銜（江西、一九歳）である。戩翼鞏は一八九六年に始めて来日した使館留学生一三人中の一人で、この時、既に東京専門学校（早稲田大学の前身）に通っていると考えられる。
- 3 一九〇九年七月二八日の閉校まで、入学者七八九二人で、卒業者三八一〇人であり、数多くの留学生に留学予備教育を行った。
- 4 創立の時期については、日華学堂に関する書類に六月と七月の二種類の記載があるが、本稿は『日華学堂章程要覧』に記載されている六月に従う。

一、日華学堂に関する研究史

これまで日華学堂をテーマとする先行研究について、筆者が管見する限り、主要の論文は以下の通りである。

もっとも早く日華学堂を取り上げたのは実藤恵秀の「中国人日本留学史稿（五）」（『日華学報』第六二号、一九三七年七月）である。その中で、『日華学堂章程要覽』（以下『要覽』と略称）に基づき、設立の時期、趣旨、教科及び二五名の留学生の入学の時期と氏名を紹介した⁵。また、同氏は「日華学堂の教育——留日学生史談（五）」（『東亜文化園』三卷二号、一九四四年）で、『日華学堂日記』（明治三一年）と『日華学堂日誌』（明治三二～三三年）全文を公開し、宝閣善教の日記『燈焰録』（明治三一）と『行雲録』（明治三二）を参照に、日華学堂の教育を解説した⁶。

呂順長は『清末中日教育文化交流之研究』（商務印書館、二〇一二年）の「第八章 浙江早期留日学生」において、日華学堂の創立の時期や浙江省出身の学生たちを取り上げ、派遣の経緯や日本での勉強及びその後の活躍を紹介した。特に日華学堂設立前に浙江省から派遣された汪有齡を始め、求是書院出身の四名にまつわる調査が詳しく、『日誌』への理解に役に立った。

一方、孫安石は『留学史研究の現段階』（大里浩秋、孫安石編、御茶の水書房、二〇〇二年）において外務省外交史料館所蔵の関連資料リストを整理し、初期の清国留学生たちにまつわる資料が多く、日華学堂の学生が注目された。その延長線において、柴田幹夫は再び『日誌』全文を読み起こし、「『日華学堂日誌』一八九八～一九〇〇」（『新潟大学国際センター紀要』第九号、二〇一三年）を発表することにより、日華学堂が再び注目を浴びた⁷。

高楠の教育思想について、武蔵野大学高楠順次郎研究会は『高楠順次郎の教育理念《抜粹》』（武蔵野大学、二〇〇八年）において、高楠の生涯を踏え、女子教育の理念と人間成就の理想を明らかにした。高山秀嗣の「高楠順次郎にとっての（教育）」（『仏教経済研究』駒沢大学仏教経済研究所、二〇〇九年）は日華学堂、中央商業学校、武蔵野女子学院の創立を通して学校教育への高楠の理念と目標、特にキリスト教の女子教育に対抗して仏教精神による女子教育の理想を分析した。

二、日華学堂設立の経緯

一八九八年に浙江巡撫廖寿豊は八名の学生を選び、日本へ留学生として派遣することに決めた。同年四月に求是書院⁸四名（錢承誌、陸世芬、陳梶、何橘時）と浙江武備学堂四名（簫星垣、徐方謙、段蘭芳、譚興沛）が来日した⁹。最初、目挽町二丁目の厚生館に滞在し、外務省が候補訳官酒匂祐三を派遣して毎日二時間、求是書院出身の四名に日本語を教えた。六月に本郷区駒込西片町一九番地の民家を借りて、中島裁之の監督の下で日本語と普通学を学ぶ。宿舎は「中華学館」との表札を掲示した。これは日華学堂の始まりである。

5 『中国人日本留学史』（くろしお出版、一九六〇年）ではほぼ同じ内容を継承した。

6 この日誌は宝閣善教の『燈焰録』と『行雲録』と並び、日華学堂の教育及び学生たちの日常生活を理解するには欠けてならない第一級の史料である。

7 このほかに徐蘇斌「戦前期日本に留学した中国人技術者に関する研究」、韓立冬「『五校特約』下の「高特設予科」、洪涛「清末留日学生—江蘇省を中心に—」、横井和彦、高明珠「中国清末における留学生派遣政策の展開：日本の留学生派遣政策との比較をふまえて」、張允起「日本法政思想研究」、史洪智「日本人法学者と清朝末期の政治改革」、劉建雲「清末早期留日政策與郭開文的日本留学」、胡穎「清末の中国人日本留学生に関する研究—主に留学経費の視点から」などがそれぞれ日華学堂の学生に触れた。

8 求是書院は一八九七年に創立された中国において最も早い普通学校の一つ、一八九八年から日本に留学生を派遣し、一九〇一年に浙江求是大学堂に改称、一九二八年国立浙江大学となった。

9 浙江省巡撫廖寿豊の指示を受け、知県候補張大鏞は蔣錫之と共に引率し、日本各種学校を視察して八月に帰国した。

そのため、日華学堂は一八九八年六月に外務省の依頼で高楠順次郎によって設立されたのである¹⁰。設立の趣旨は「専在教養清國學生。務使學生從速講習我言語。諳熟我習俗。並修普通各科之學。而為治專門各科之地歩。以期培成其材」（専ら清国の学生を教養し、努めて学生をして速やかに我が言語を講習し、わが風俗に諳熟し、並びに普通各科の学を修め、而して専門各科を修むるの地歩たらしむ。以て其の才に培うを期する）¹¹ということで、日本語と普通科目の学修を目的とする予備教育機関である。

高楠順次郎は総監を務め、中島裁之は初代堂監（一八九八年六月～九月二〇日）、宝閣善教は二代目堂監（一八九八年九月二五日～一九〇〇年一〇月）として教育を監督し、学堂日誌を記した。各教員の担当科目（一八九九年二月）と一週間の授業時間数は以下の表のとおりである¹²。

担当教員	担当科目	授業時間数
高楠順次郎	英語	三時間
宝閣善教	英文法	三時間
梅原融	物理、化学、会話、読書	一五時間
海野詮教	日本語文法、読書、作文	一二時間
林田源太郎	歴史、英語	六時間
吉川寿次郎	植物、算数、幾何学	六時間
桜井義肇	地理	三時間
酒匂祐三	日本語会話、読書	三時間
浅田駒之助	会話、実習臨時手伝、物理	六時間

宝閣善教は京都文学寮出身で帝国大学文科大学史学科三年生、梅原融は同じく文学寮出身で慶応義塾文科卒業生、海野詮教と林田源太郎は東京専門学校卒業生、吉川寿次郎は帝国大学医科大学三年生、桜井義肇は京都文学寮卒業生、酒匂祐三は外務省候補訳官、浅田駒之助は彦根中学校教師であった¹³。

日華学堂は日本語と普通学を速成するという目的で創立され、二年間のカリキュラムで日本語と普通学の教育を施す予定だが、課程は進学先別に正科と別科で整っていた。

10 一八九八年三月二日に、高楠順次郎は大学講師のまま、通信大臣末松謙澄の秘書官となり、この関係から外務大臣秘書官三橋信方に日華学堂設立を依頼されたと思われる。六月以降、日華学堂の仕事に集中するため、七月八日に通信大臣秘書官を依願免官となった。

11 『要覧』設立趣旨を参照。筆者訳。

12 同年三月一〇日付で高楠が外務省に提出した「南洋公学堂学生就学概況報告」には浅田に代わり、美濃田琢磨（代数）の名前が見えた。

13 『在本邦清国留学生関係雑纂 陸軍海軍学生外之部』（3-2530-0066）を参照。

三、転地勉学のきっかけ

現在、外務省外交記録に日華学堂をめぐる資料（国立公文書館アジア歴史資料センター所蔵）が残っている。その中で浙江留日学生監督孫淦¹⁴と外務大臣秘書官三橋信方¹⁵及び高楠順次郎の一連の書簡が注目される。

孫淦は三橋信方への書簡（一八九八年六月二七日）において、「成城学校ノ学生ハ避暑兼箱根ニ赴キ同所ニテ勉学スル趣キ至極賛成ニ有之然ルニ日華学堂ハ同様之計画無御座候哉若シ無之儀ナレバ迂生ノ監督中ニ係ル杭州府ヨリ出身ノ留学生六名ノ中脚氣其他ノ患者等モ有之転地療養ヲ兼ネ勉学ニモ相成」と、浙江省から派遣された六名の学生に対して成城学校¹⁶の学生と一緒に箱根で避暑をするよう、提案した。六月二九日に、三橋信方は高楠順次郎宛に書簡を送り、孫淦の要望を伝え、意見を求めた。六月三〇日に学堂教員の梅原融が成城学校の教師竹内馬次郎を訪れ、成城学校学生の箱根避暑のことを問い合わせ、日華学堂の学生たちが合流する可否を打診した。

杭州府出身の六名は一八九八年六月に求是書院から派遣された銭承詒、陸世芬、陳梶、何橋時¹⁷、杭州蚕学館から派遣された汪有齡¹⁸、それから浙江省留日学生監督孫淦の紹介で入学した私費留学生の呉振麟である¹⁹。そのほか、日華学堂には、南洋公学²⁰と北洋学堂と北洋水師学堂から派遣された一八名、私費留学生二名が在籍していた²¹。

七月三日に、三橋信方へ高楠順次郎は返信をし、次のように二つの理由を挙げた²²。

本学堂ニ於テモ学生一同成城学校ノ如ク転地避暑出来得ベキヤ否ヤ熟議ヲ遂ゲ候処、到底実行シ難キ候其理由

- 14 孫淦、字は実甫、上海出身で、大阪で益源号を経営する在日の商人であるが、清光緒年間に浙江巡撫廖寿豊に留日学生監督に任命された。
- 15 三橋信方は一八五六年（安政三年）二月に江戸に生まれ、一八七七年（明治一〇年）より工部省に出仕し、それ以後、神奈川県二等属、同一等属、外務省御用掛、神奈川県書記官、同参事官、臨時横浜築港局次長を歴任。一八九六年（明治二九年）、外務省参事官兼書記官に任命され、会計課長、外務大臣秘書官、秘書課長、電信課長、会計課長、弁理公使などを経て、一九〇一年（明治三四年）にオランダ公使兼デンマーク公使に任命された。一九一〇年（明治四三年）六月二五日に死去。本研究の往復書簡の時期は外務大臣秘書官在任中にあたる（『官報』第四一〇四号、明治三〇年三月一日）。
- 16 一八八五年に歩兵軍曹出身日高藤吉郎により設立された「文武講習館」を母体とし、一八八六年八月成城学校と改称。陸軍士官学校の受験を目的として、幼年学校と密接な関係を持つ。陸軍は成城学校に毎年一二〇〇円の補助金を提供、宮内省は牛込原町の校地を下賜。日高藤吉郎は初代校長、川上操六は第四代校長、児玉源太郎は第七代校長を務めた。同校は一八九八年七月に清国留学生部を設置し、清国政府派遣の陸軍士官学校入学希望者の教育を担当。同時期に振武学校がある。
- 17 出身地として、何橋時は浙江省紹興府諸暨県、陳梶は浙江省金華府義烏県、陸世芬は浙江省杭州府仁和県、銭承詒は浙江省杭州府仁和県である。
- 18 汪有齡は蚕の養殖を学ぶために杭州府から派遣され、一八九七（光緒二十三年）二月一日（旧暦一月二日）に神戸に着き、まず大阪で山本憲に日本語を学び、翌年三月に埼玉県児玉町児玉村の競進社に移り、蚕の養殖を学び始めた。時事政治に興味を持ったため、進路変更を杭州府知事に申し出て、許可を得て九月二五日に日華学堂に入学し、専門学校を目指した。『要覧』と『汪康年師友書札』（上海図書館編、上海古籍出版社、一九八六）汪有齡一九（一〇八九頁）を参照。
- 19 呉振麟は来日する前に、上海育才書塾で二年間英語を学んで卒業した。一八九八年一〇月三一日に日華学堂に入学した。
- 20 南洋公学は一八九七年三月に創立され、師範学生を受け入れる。中国の師範教育の先駆であり、一九〇四年に上海商務学堂に改称、一九〇六年郵伝部高等実業学堂になり、一九一二年上海工業専門学校、一九二一年に上海交通大学となった。
- 21 詳しくは一八九九年一月二〇日、南洋公学から派遣された章宗祥、富士英、雷奮、胡昶泰、楊蔭杭、楊廷棟が入学した。二月六日に私費留学生陳玉堂が入学し、三月一七日に、同じく私費留学生鄭康者が入学を求めた。さらに、三月三一日に、北洋学堂と北洋水師学堂から派遣された官費留学生一二名（黎科、張煜全、王建祖、張奎、金邦平、周祖培、安慶瀾、高淑琦、蔡成煜、沈珉、張錫緒、鄭葆丞）が新たに入学した。これにより、在學生は二六名に増えた。五月二一日に、私費留学生梁炳光と譚錫鏞が入学を求めたが、六月二日に入学を辞退した。さらに鄭康者は退学を希望したため、実質は二五名である。
- 22 『在本邦清国留学生関係雑纂』国立公文書館アジア歴史資料センター（3-2533-0020-22）を参照。

- 第一、 成城学校ニ付来接時凡候処往復汽車賃家賃等凡五百円ト見込ニテ一年中ノ学資ヨリ仕
払不足額ハ参謀本部ヨリ補足スベキ筈之由、当学堂ニ於テハ学資中ヨリ特別支出ヲ到底
出来得ベカラザル義ニ付廿五名ニ対スル三百円中外ノ補助金ナクテハ実行難致候
- 第二、 成城学校ニテハ六名ノ教師ヲ遣シ勉学為致候赴キ本学堂ハ学課非常ニ繁雜ニシテ教師ノ
数モ随テ多ク到底該地ニテ完全ノ授業致事六ヶ敷其上假令箱根ニ移ルモ本学堂ノ借家雇
人等ニ対シテハ依然本来ノ費用ヲ要シ此点ニテハ全ク二重ノ経費ヲ要シ候

右二箇之理由ニテ目下転地勉学之義ハ本学堂ニ於テハ執行シ得ザルモ杭州生而已彼地ニ移転シ
他生ヲ引止メ候時ハ不平ノ起ルハ勿論ニテ既ニ数日前ヨリ成城学校生転地ノ風聞相伝ハリ一同羨
望致次第二付本学堂管理上非常ノ不都合ヲ感ジ候此際殊ニ一年ノ資金中ヨリ振替尚不足額ハ御
省ヨリ御補助出来下様之義相叶候ハ、至極好都合ニ御座候若シ此事不相叶候ハ、本堂取締上ヨリ
ハ杭州生六名ノ転地ヲモ相断リ度思望ニ有之候、然シトモ孫滄氏権内ニ在リテ殊ニ別途支出ノ義
同人ニテ引受け食事監督等成城学校生ト同様取扱ヒ被受候以上ハ強テ拒絶致ス間敷候

右ハ今迄各生不平均ノ取扱ヨリ不平ヲ生ゼル場合度々有之候ヨリ有リシ佞申上候次第二付先方
へハ可然返答被求下度何レトモ本学堂ニ於テハ絶対的ノ拒絶ハ不仕候へ

此書 右々殊ニ成城学
校生ニ相加ヘ食テモ器
等リ校教師ニ依テ致
事儀ニ付本学堂ニ於テ
之ヲ拒ル理由モ之義ト
致候

本学堂ニ於テモ学生一頁成
城学校ノ如ク轉地難者
出来得ベキヤ否ヤ熟議ヲ
遂ゲルニ到底宜ク
之難ク其理由

第一成城学校ニ付来接時
凡候往復汽車賃家賃等凡
五百円ト見込ニテ一年中

図1「三橋信方への高楠順次郎の返信」

〔「日華学堂章程要覽配布之件」外務省外交資料館「在本邦清国留学生関係雜纂 雜ノ部」第一卷、
アジア歴史資料センター、Ref.B12081625800 所収〕

凡五百圓に及ばず一年中ノ
 学費ヲ仕拂ふ是レ歎ハカク
 謀本部ヲ補足スルハ其由
 尙自學堂王様ニ學費中ヨリ
 特ニ出ス列存出未得ハ
 カラカニ義ヲ申上ル者ニ對スル
 三百圓中外ノ補助金ヲ以テ實
 行難シハ
 第一成城學校ニハ六名教師
 ヲ養ヒ勉學多ク且チ其學堂
 學課非常ニ繁雜ニシテ教
 師ノ數モ隨テ多ク到底該
 地ニ完全ノ授業成ルコトハ
 尙其上面令箱根ニ移ル
 モ本學堂、傍家ノ府人ホ
 對シテ依然トモ其費用ヲ

図2「三橋信方への高楠順次郎の返信」

(同前)

つまり、全員で転地勉学をする場合、学堂の費用では到底支給できないと説明し、いったん断つた。

七月四日に、成城学校教師竹内佐馬次郎より成城学校の箱根避暑への合流ができないとの回答があった。

七月五日に、高楠は学堂に来て、宝閣より成城学校への照会についての報告を受けた。そこで、翌日直ちに日華学堂避暑の予算を作成するよう、宝閣に指示を出した。宝閣はさっそく成城学校幹事奥山三郎を訪問し、高楠の自宅に至り、予算の編成に着手した。

七日に外務省に予算を提出し、直ちに三橋信方から「不足額金參百九圓貳拾錢ハ当省ニ於テ補助致ス」との返事もらった。八日に三橋信方は孫淦へ書簡を送り、日華学堂も夏期に転地勉学の予定を知らせた。

一〇日に、高楠、宝閣は避暑地視察のため、伊豆山へ出発し、一二日に帰京した。さらに、一五日早朝に、避暑地視察のため、高楠と宝閣は上野発汽車に乗り、那須塩原へ向かった。一六日に塩原に滞在し、避暑のための家の借用を決めた。一七日に東京に戻り、一八日に生徒たちに那須塩原への転地勉学を告示した。

このように、高楠は予算作成から実地調査まで、みずから関わり、短期間に行った。

四、転地勉学の実施

七月二四日、宝閣は高楠の自宅に行き、打ち合わせをした後、外務省で補助金をもらった。さらに、上野駅に電話して、二六日午前七時発の五〇人乗りの客車一台の貸し切りを予約した。

しかし、二五日に洪水が発生し、塩原への沿道は線路が不通のため、二六日出発を取りやめた。二六日、宝閣は料理人森江を連れて先発隊として塩原に向かった。一方、舎監の田代は上野駅へ行き、駅長代理と面会し、二七日発の客車一台の貸切を予約した。さらに、引率の吉川に出発の時刻を連絡し、学生たちに荷造りの準備を命じた。

七月二七日、早朝七時に学生二二名²³、料理人三名、引率教師梅原、吉川、田代三人が上野駅で電車に乗り、出発した。途中線路が寸断し、修復中のところがあり、通常より二時間遅れて、午後二時三〇分ごろ、西那須野に到着した。しばらく休憩した後、病人二人を人力車に、二三人を馬車五台に分乗させ、一行は保養地で温泉郷として有名な福渡戸へ出発した。凸凹で険しい山道を越え、夜八時頃ようやく目的地に着いた。まるで仙境のような景色を目の当たりにして、梅原は七絶漢詩二首を詠った。

学生たちは三日間、散策して、三一日から梅原、吉川両教師は授業を始めた。また、八月二日夕方に高楠は現地に到着し、みんなと合流した。

約一か月の転地勉学は観光と授業を中心としたが、その中で特筆すべきことが三つあった。

まず八月四日に古町楓川楼で光緒帝の天長節を祝う集会が開催され、高楠、梅原、宝閣、吉川、田代という教職員五名のほか、避暑中の文部省普通学務局長の澤柳政太郎、参事官の野尻精一が出席し、章宗祥と汪有齡も登壇して演説した。和洋折衷の宴席の中で、学生たちは余興として中国の詩や俗謡を吟じた²⁴。

次に、島村抱月はたまたま同じく塩原で避暑していたので、日華学堂の一行と遭遇した²⁵。『読売新聞』（一八九九年八月二一日）に「塩原雑俎」を掲載し、留学生たちのことに触れて、「日華学堂の支那学生は二十三人とかにて、中には活発有為の好青年も多く、殊に近日は土地馴れて、余程ハキ々々致し来れるやうに見受け候。内六人ばかりは専門学校の政治科に入る人のよし、あとは大学の法科工科多く、医科は人の之れを勧むるも決して肯せざる由に候。此の辺の消息頗る我邦当年の事情とは異なりておもしろきやうに覚え候」と、「活発有為の好青年」という素直な感想を述べている。この時期は留学生がまだ珍しい「遠来の珍客」のような存在で、特に塩原のような避暑地では、注目されていた²⁶。

23 五月二八日に鄭康者は退学して帰国した。そして六月一三日に楊延棟、六月二八日に楊蔭杭、七月一九日に雷奮はそれぞれ一時帰国したため、転地勉学に参加したのは二二名である。

24 これについては、『時事新報』（明治三二年八月一〇日）が記事を掲載した。また『日華学堂日誌』（明治三二年八月四日の項）を参照。

25 田代舎監は同宿の島村抱月を訪れ、日華学堂の様子を語ったという。『日華学堂日誌』（明治三二年八月一〇日の項）を参照。

26 『日華学堂日誌』（明治三二年七月二七日の項）を参照。



図3『読売新聞』(1899年8月21日) 島村抱月「塩原雑俎」(ヨミダス歴史館より)

さらに、呉振麟は八月四日に突然下痢をしたので、職員たちが驚いた。引率の田代は下僕とともに深夜まで看病し、東京から医者 of 橋本先生を呼び寄せるだけでなく、新たに看病人を雇い世話をした。その後、汪有齡と銭承詒も倒れてしまい、八月二四日に、田代舎監が使用人とともに、汪有齡を看護して早目に帰京することになった。とかく病気などのトラブルが多かった。

一行は二グループに分かれ、帰京する。八月二六日に、梅原、吉川は学生の半分を引率して、帰途に就き、二七日に、高楠、宝閣、桜井は料理人と学生を連れて帰京した。また、実際にかかった費用は予算を百円ぐらい超過したという。高楠と引率教師はさまざまなトラブルに遭遇してかなり苦労したが²⁷、充実した転地勉学であった。

五、高楠順次郎の教育思想

高楠の教育思想については、前述したように、高山秀嗣は日華学堂、中央商業学校、武蔵野女子学院の創立を通して学校教育への高楠の理念と目標、特にキリスト教の女子教育に対抗して仏教精神による女子教育の理想を分析したが、塩原での転地勉学を通じて、高楠の教育思想の別の側面が見られる。

まずは平等意識を重視することである。

杭州府派遣の六名の学生のみ成城学校の転地勉学に合流させるという孫滄の要望に対して、不平等のため、ほかの学生の不満を引き起こしかねないという理由で断った。この時期に求是書院からの四名と汪有齡、呉振麟という杭州府派遣の六名のほかに、南洋公学からの六名、北洋大学からの一二名及び私費学生一名が在学している。転地勉学は学生監督と外務大臣秘書官からの要望とは言えども、六名を特別扱いたら教育や管理の面において不都合が生じてしまうため、きっぱり断った。

27 病気の学生を看病するほかに、賄い方と下女の醜聞もあり、食事に対する学生の不満もあり、様々な問題があった。

これは近代学校制度が持つ「平等処遇」という理念に基づき、教育を行っている証拠であり、後に女子教育に深く関わったのもこの理念の現れではなかろうか。

次に、『日華学堂日誌』によると、高楠はしばしば学生を説諭する場面があった。例えば、沈珉がパンの不足を訴えて田代舎監と筆談の末、衝突が生じた時、何橋時は制服のことで学生らしからぬ態度を示した時、学生たちが食事に不満を訴え、賄い方の解雇を求めた時、その後も同じような不満が出た時に、度々学生たちを呼んで説諭を加えた²⁸。高楠は学堂が知識を教えるだけでなく、日常生活の中でトラブルが発生する時、いかに自分の意見を伝えるか、学生たちに説明したのではないかと思われる。これは、高楠の教育者としての一面を示した。同時に乙級生が田代舎監の授業に不満を抱き、拒否の理由書を提出した際に、田代舎監を訓諭した²⁹。

第三に、学生たちの要望に対する柔軟な対応である。日華学堂は日本語と進学に必要な普通学を教える予備教育機関で、当初二年間の教育計画を定めたが、学生たちが入学後、早くも一高、帝大及び専門学校への進学を焦り始めた。汪有齡など求是書院派遣の学生は孫淦を通して三橋書記官に交渉し、高等学校に入ろうとした³⁰。同時に南洋学生に四人、北洋学生に二人が私立東京専門学校に進学したのも外務省と高楠の予想外の出来事であった。今回の留学生は両国政府の斡旋で行われたもので、監督の責任上、官立学校に進学する必要があるが、学生たちは私立学校の学習期間が短いため、進学を希望した。これも互いの思惑が違って、問題になった³¹。そういう意味で後に問題になった「速成」という要望は初期から留学生の間にあった。

それにもかかわらず、高楠は一高進学、東京専門学校への進学希望に沿って教育課程を調整した。

第四に、すさまじい行動力である。転地勉学について、高楠は精力的に外務省三橋書記官と交渉し、その後、予算の編成から伊豆山と那須塩原の実地調査まで、高楠は自ら参加し、短期間で計画を立て、実施にこぎつけた。

また、初代舎監の中島裁之を始め、土屋、上田などの教員の退職が多く、わずか一年半の間に、舎監が三人も変わった。そのほか、使用人の問題³²など、学校経営と宿舍管理の難しさに迅速に対応した。

おわりに

高楠順次郎は仏教学者である一方、東京外国語学校や東洋大学の学長を歴任し、行政手腕を発揮した。また、学校経営者として中央商業学校、武蔵野女子学院の創立と経営に携わった。これらの教育者と学校経営の原点は日華学堂であった。

日華学堂は成城学校とともに、外務省が指定した清国留学生の予備教育機関であり、章宗祥、金邦平のような國務大臣、王建祖、張煜全のような学校長、呉振麟のような外交官を多く輩出し

28 『日華学堂日誌』明治三二年七月二〇日の項、九月二五日の項、一二月八日の項、明治三年一月二五日の項、二月二一日の項をそれぞれ参照。

29 『日華学堂日誌』四月一二日の項を参照。

30 『汪康年師友書札』（上海図書館編、上海古籍出版社、一九八六）「汪有齡二十六」（一〇九六頁）を参照。

31 『在本邦清国留学生関係雑纂 陸軍海軍学生外之部』（3-2530-0101～0117）を参照。

32 『日華学堂日誌』によれば、塩原避暑中に賄い方と下女の醜行があり、また食事をめぐって学生と使用人とのトラブルが度々あった。

たが、僅か三年ぐらいで終わってしまった³³。高楠順次郎は一九〇〇年に日本橋簡易商業夜学校を創設し、一九〇二年に中央商業学校を創立した。さらに一九二四年に武蔵野女学院を設立し、学者だけでなく、教育者として大きな足跡を残した。宝閣善教、梅原融、桜井義肇は高楠とともに、中央商業学校の創立に関わった。このことから、日華学堂の関係者は教育者として成功している。

高楠を始め、日華学堂の関係者は京都西本願寺文学寮で学んだ人たちは、仏教精神で清国留学生の教育と指導に親切かつ熱心に取り組んだ。教育のほか、校舎兼宿舎を探し、料理人を探し、健康維持に必要な運動設備を作らせた。三崎町の嘉納塾と交流して、留学生教育の経験を語り合った。また、毎月の末に、高楠は費用の精算をして、学校経営に必要な経営と管理を経験した。

その中で、転地勉学は高楠にとって大きな試練であった。明治期の転地勉学は今の修学旅行と違い、長期滞在であるため、女中と料理人を連れて学校をそのまま那須塩原に移したようなものであった。費用もかかり、呉振麟などの急病人も出て、苦労が重なった。

日華学堂は僅か三年間ほどしか存在しなかったが、有為な人材を育て、嘉納塾（後の弘文学院）や成城学校と並んで、初期の清国留学生教育に大きな役割を果たした。早熟で終わってしまったのは惜しいが、留学生の予備教育機関を経営した経験は後の中央商業学校と武蔵野女子学院の創立と経営に生かされたのではないと思われる。

参考文献

- ・『日華学堂章程要覽』（『皇朝蕃艾文編』第一六卷所収、上海官書局、一八九九年六月）
- ・実藤惠秀「中国人日本留学史稿（五）」（『日華学報』第六二号、一九三七年七月）
- ・中央商業学校編『宝閣先生追悼号』（三秀舎、一九四〇年）
- ・前嶋信次「史話 高楠順次郎」（『大法輪』一九五一年七月号～一〇月号）
- ・鷹谷俊之『高楠順次郎先生伝』（武蔵野女子学院、一九五七年）
- ・武蔵野女子大学仏教文化研究所編『雪頂・高楠順次郎の研究 その生涯と事蹟』（大東出版社、一九七九年）
- ・さねとうけいしゅう『中国人日本留学史』（くろしお出版、一九八一年）
- ・さねとうけいしゅう『中国留学生史談』（第一書房、一九八一年）
- ・上海図書館編『汪康年師友書札』（上海古籍出版社、一九八六）
- ・浙江大学日本文化研究所編『江戸・明治期の日中文化交流』（農文協、二〇〇〇年）
- ・大里浩秋、孫安石編『中国人日本留学生史研究の現段階』（御茶の水書房、二〇〇二年）
- ・徐蘇斌「戦前期日本に留学した中国人技術者に関する研究」（『表現における越境と混淆：国際日本文化研究センター共同研究報告』所収、井波律子、井上章一編、国際日本文化研究センター、二〇〇五年九月）
- ・川崎真美「清末における日本への留学生派遣—駐清公使矢野文雄の提案とそのゆくえ—」（『中国研究月報』第六〇巻 第二号、二〇〇六年二月）
- ・陶英恵『民国教育学術史論集』（秀威資訊科技股份有限公司 二〇〇八年）
- ・武蔵野大学 学祖高楠順次郎研究会『高楠順次郎の教育理念《抜粋》』（武蔵野大学、二〇〇八年）

33 日華学堂はいつ廃校したのかはっきりした記録がない。『日華学堂日誌』の記録は一九〇〇年一〇月二六日までで、同年に学生が入学した記録がなかった。しかし、学生監督として高楠順次郎は一九〇二年一月に求是書院派遣と南洋公学派遣の学生六名のために学資金増額の申請書を提出した。

- ・高山秀嗣「高楠順次郎にとっての〈教育〉」（『仏教経済研究』駒沢大学仏教経済研究所、二〇〇九年五月）
- ・酒井順一郎『清国人日本留学生の言語文化接触』（ひつじ書房、二〇一〇年）
- ・呂順長『清末中日教育文化交流之研究』（商務印書館、二〇一二年）
- ・史洪智「日本人法学者と清朝末期の政治改革」（『近代世界の「言説」と「意象」：越境的文化交渉学の視点から』関西大学文化交渉学教育研究拠点、二〇一二年一月）
- ・横井和彦、高明珠「中国清末における留学生派遣政策の展開：日本の留学生派遣政策との比較をふまえて」（『経済学論叢』同志社大学、二〇一二年七月）
- ・柴田幹夫「『日華学堂日誌』一八九八～一九〇〇」（『新潟大学国際センター紀要』第九号、二〇一三年）
- ・韓立冬「『五校特約』下の一高特設予科：修了者の進路を中心に」（富士ゼロックス株式会社小林節太郎記念基金編、二〇一四年）
- ・金富軍「張煜全在清华学校的教育実践考察」（『教育史研究』二〇一四年第三期）
- ・黄政傑編『教育行政與教育發展：黃昆輝教授祝壽論文集』（五南圖書出版、二〇一五年）
- ・洪涛「清末留日学生－江蘇省を中心に－」（花園大学文学部研究紀要、二〇一六年）
- ・岩佐昌暲、李怡、中里見敬『桌子的跳舞「清末民初赴日中國留學生與中國現代文學」』（花木蘭文化出版社、二〇一六年）
- ・張允起『日本法政思想研究』（元照出版公司、二〇一七年）
- ・胡穎「清末の中国人日本留学生に関する研究－主に留学経費の視点から」（神奈川大学大学院『言語と文化論集』特別号、二〇一七年三月号）
- ・楊絳「私の父を回想する」（『民間歴史』香港中文大学中国研究服務中心）
<http://mjlsh.usc.cuhk.edu.hk/Book.aspx?cid=4&tid=49> 二〇一八年三月確認